シロコマカの呪い

竹田 杏奈

ぼくの母はなにかがおかしい。一週間ほど前からほぼ一日中ずっと不気味な笑みをうかべていた。仮面をかぶっているようだと、少しこわい。父は三年前に病気で死んだから、たよれる人もいない。どうしようと考えながら、今日もいつもの道で下校していた。

あともう一つ、あれを読んでから、何かがおかしい。それは、一週間前、ぼくのクラスの五年四組に転校してきた健太という男の子の書いた作文の一部だ。

「ぼくの本名は、シロコマカです。毎年同じ名前の人を殺します。三回殺したら、他の名のターゲットになります。ルーレットです。」

意味が分からない。シロコマカという名前そんなにいないだろ。じゃあ三回殺したら、自分が他の名になるのか。いつも考えてしまう。背中がゾッとする。

そんなことを考えていたら家についた。左を見ると、ニヤニヤしながら母が、夜のご飯を考えていた。もういやだ。家出しようかな。そう思いながら、他の事を考えようとした。あっ。そういえばもうすぐ夏休みだ。あと何日か数えようとしてカレンダーを見た。今日はいとこの父のそうしおじさんが死んだ日だ。ぼくと同じ名前なんだ。

夜ご飯を食べて、寝室に行こうとした。すると、かまを持った母が立っていた。グサっとにぶい音がして、意識がもうろうとした。

やっと気づいた。母にはシロコマカくんが取りついていた。シロコマカを反対から読む。カマコロシ。そうだ昨年はぼくと同じ名のそうしおじさんが死んだ日だ。三回同じ名の人を殺す。年に一度だ。シロコマカは言った。

「やっと気付いたね。お気の毒さま。ハハハッハハハッ。なんておもしろいんだろ。ぼく人間じゃないんだよ。次は君の三年生の友達のそうしくんだよ。ハハッ。」

ぼくは意識が途切れた。人生が終わった。

「次の次はあなたの番かも。ハハッ。」